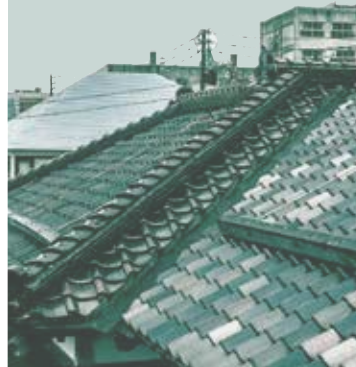


はこだて たてものがたり

池ノ上真一 / NPO法人はこだて街なかプロジェクト



大正期の隆盛映す / 太刀川家洋館 (函館市弁天町)

函館市弁天町界隈、かつて埠頭筋と呼ばれた通りに、漆喰塗りの袖壁を左右に伝える土蔵造りの重厚な商店建築が建つ。国の重要文化財であるこの「太刀川家住宅店舗」の隣に、寄り添うように佇む洋館がある。函館市の景観形成指定建築物「太刀川家洋館」である。

建設は1915(大正4)年。木造2階建て入母屋(いりもや)瓦葺き、若草色の下見板張りに

擬洋風の応接専用室

よる外壁の仕上げが特徴的だ。破風(はふ)や軒下に施された彫りの深い植物模様、コリント式円柱が支える函館独特の3連アーチ。隆盛を誇った大正期の「函館を代表する建築物の一つである。

「うちの建物も函館の和洋折衷建築の一つの様式なんですよ」

北海道銀行となる第百十三銀行、北海道電力や函館市電、函館バスとなる函館水電など数多くの企業の一職に就いた。1934(昭和9)年の函館大火の際は自身の貯蔵米を炊き出しに充てるなど、被災者救済や治安維持に貢献したという。

函館の政財界の要人が、この擬洋風の建物で2代目善吉と話し込んだのであろう。彼はこの洋館について「函館や北海道のための政談や商談をするに相応しい建物を」と語っていたという。実際、1階には函館西洋家具製造の元祖とも言われる洋家具職人神永貞助の家具が揃い、2階には黒檀の床柱を据えた床の間があり、上流の賓客を迎えるに足る内装であった。

実は2代



上/上質な雰囲気を漂わせる太刀川家洋館の前に立つ太刀川雅子さん。

利用しながら維持する

たびたび大火に見舞われた函館では、レンガ造など防火の機能

目善吉は、世界的企業ソニーの創設者の一人、井深大(いぶか・まさる)の実父の従兄弟にあたる。父親を早く亡くした井深のために学資を支援し、ソニーグループの前身である東京通信工業の設立に際して出資もしている。太刀川一族の訃報を聞いた井深が自家用飛行機で来函したとの話もあり、井深もこの洋館に足を踏み入れた一人であったかもしれない。

と、太刀川家6代目当主の夫人雅子さんは言う。

「函館で和洋折衷建築としてよく知られるのは、この連載の第1話で紹介した小森家住宅店舗のように1階が和風、2階が洋風と、和洋の様式が上下に並んだ外観を持つ建築だ。京町家をはじめ本州以西で見られる町家建築の2階の外観が洋風になったもので、太刀川家住宅店舗もこれに属する。」

能を持つ洋式の建築技術が取り入れられた。建築構造的に維持管理費用が負担となりがちである。そんな中で太刀川雅子さんは、太刀川家住宅店舗の一部でカフェレストランを2018年まで10年営み、また市内にある歴史的建造物のリノベーション(新たな機能や価値を付加する改装)を手伝い、「利用しながら資金を生み出して維持する」道に挑み続けてきた。

「函館の未来のために、この建物を使いこなしたい」と雅子さん。函館らしさの一つである上質な文化と環境を遺(のこ)し使いこなすことが、地域の未来



しかし函館には、それ以外にも大型で重厚な町家や洋館が多く存在する。多くは内部に和室を持ち、屋根には瓦をふきながら、外観は洋風を擬して大工が建てた建築物である。それら「擬洋風」とも呼ばれる和洋折衷の建物は、豪商らにより建築され、太刀川家洋館もこの中に含まれる。

函館の太刀川家の始祖、2代目太刀川善之助は江戸期に越後国長岡から箱館(現函館)に北前船で渡り定住した。当初は米穀商、のち漁業、海産商、回漕、採氷と多角化した。その次の代の初代善吉が太刀川家住宅店舗を1901(明治34)年に建設した。

その息子で太刀川家の「中興の祖」とされる2代目善吉は、大正から昭和初期にかけて北海道で最も多くの肩書きを持った実業家として知られ、商談のための応接専用室としてこの洋館を建設した。28歳で函館米穀商同業組合長に就任し、後に北海道新聞社となる函館日日新聞、

のためになると。太刀川家では目下、洋館を上質な空間を提供するゲストハウスとして活用し、隣の住宅店舗もパーティーや展示会、会議、撮影などの場として運営している。深刻な人口減や高齢化に直面する函館市西部地区は、社会的にも空間的にもリノベーションが必要とされている。太刀川家の二つの建物がこのリノベーションをけん引することを期待したい。2代目善吉が函館のまちづくりに貢献したように。◀▶

DATA

建築年 / 1915(大正4)年
構造 / 木造2階建て 延べ面積 / 102.89㎡
様式 / 和洋折衷建築、入母屋瓦葺き屋根、下見板張り外壁

写真 / FOLPHOTO 水本健人



※「はこだて街なかプロジェクト」のホームページに、この連載のサイドストーリーを掲載しています。